2022 年 12 月号

Community & Friend

有限会社アルファー
大阪府高槻市氷室町 4-13-3
吉田 清一郎

過去の月間通信は https://www.alphar-net.com/monthlymail.htm

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 12 月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。

それにしても、まあ～凄い のひと言だわ。

子供の頃、父親が好きで栽培していた菊の数々を見て、その規則性の不思議に魅了されていた。そういえば最近弊社の中澤が九州の企業さんの新店 Open に際して依頼を受け、『 自然界って 不思議 』って、フィボナッチ数列をテーマに、特別栽培農産物の Guide-Video を作成していた。なかなかの出来栄えだった。そういう意味では自然の造形美というのは、遺伝子が作り出しているのだろうけれど、その遺伝子そのものも亦自然界が作り出した法則に基づいた決まりに従っている。従って、不完全、脆弱な遺伝子はその秩序の前に淘汰されてしまう。

自然の摂理に順って 1 万年程度を暮らした私たちの原型の上に、異変によって中東に移動していたシュメリアンと、その刺激を受けた民族が列島に戻り、融合し、萬世一系の時代へと流れて行ったのではないか。裕福な人は船で、そうでない人は亜細亜の国を辿りながら、徒歩で此処に着いた。そう考えれば、裕福な人が関東の鹿島や香取の入り江に最初の拠点、つまり高天原を築いたと想像する。今も、茨城県のその地域にはズバリ『高天ヶ原』という地名が地図上で見つかる。そこから九州の高千穂辺りに降臨したとされている。その際、『鹿島』から出立して辿り着尽き上陸した地が『鹿児島』というのも納得できる訳だ。時期は詳しく記憶上整理出来ていないが、出雲は『国譲り』神話として残っているだけあり、話し合いで解決したのだろう。九州閥の方はそういう記録が無いので、やはり武力衝突したのであろう。その様に考えると『隼人』と言われる勢いのある族が棲む処だったのだろうと想像している。

でも、この頃になると、途端に自分の興味は薄れていく。萬世一系に興味が無い訳では無い。だけどつまらなくなってしまう。きっと、この列島特有の支配と被支配の対立に留まらない気が、薄まっていく事を感じているのだと思う。支配と被支配の構造を認めてしまうと、世界は矮小に思えて奥行を失くしてしまう。対立する二極の相関と相克こそが、この惑星の上で豊かに暮すコツのような気がする。岡本太郎が 1970 年の大阪万博で、『人類の進歩と調和』をテーマとする象徴的なモニュメントの依頼を受けながら、『人類は縄文時代から少しも進歩などしていない』と言い、あの訳の分からないわりに妙に存在感のある太陽の塔を作った。彼の絵画も彫刻も作風はこの時代を彷彿とさせる。私の思う縄文時代も、相克であるが故にエネルギーが生じ、そのエネルギーがあるが故に相関していける暮らしをイメージしている。

今年の秋は、私も中澤も仕事にひと区切りをつける時期に当たっていて、それで 5 日間仕事を離れ、つまり前後 2 日ずつの土日を加え都合 9 日間の日程で、東北辺りの縄文遺跡を訪ねる旅を計画していた。まあ、色んなことはあるもので、結局実現する事は出来なかったが、それは今ひとつ訪問する場所が具体的で

はなかった事も要因としてある。

自分が縄文自体に興味を持つきっかけは、先月書いた通りだが今から 20 年 25 年ほど遡る。その時期に相次いでそういう書籍にも出会った。強烈だったのが、石垣島で定宿にしていたホテルの図書室に置いてあった 2 冊の本。いずれも著者は『鈴木旭』という市井のひとだったが、要はこの列島に縄文時代、つまり文明の発祥と教わったエジプトのピラミッドより遥か以前に造営されていたという事を知ったからだ。春分・秋分・夏至・冬至の方位ラインもしっかりしていて、そのレイライン上に色んな山頂や神社が配置されている。

著者は『日本にピラミッドなんて、荒唐無稽と思われるだろうが・・』と謙虚だが、自分自身はこれを知った時に、先月に書いた『東方に理想の国家がある』という言葉に納得が出来たし、それを日本列島から中東に伝達したのが Sumerian だと、それこそ荒唐無稽な自説を持つに至った。

自分の父は中学生の私に学校を休ませては、同じようなテーマで連れ歩いた。もっとも父は自分にはユダヤの血が流れていると感じ、中近東の文化・文明に興味を抱いていたようだ。身体を使っても、頭を使っても、感性を使っても、いつも人より秀でていた。最後は本屋の主人で終わったが、残った父の本棚にはサミュエル・スマイルズの『自助論』が残っていた。相当数の線が引かれていたのを見ると、これを枕に寝ていたのだろう。おそらく、父は、何処にいても、何をしても、自分は異邦人ではないかという想いに駆られていたのかも知れない。

そんなある種父に似た存在の増井勇夫という方が我が社にはいてくれる。先日話しをしていると、何でも、またかつて勤務した株式会社キューピーの後輩の、各社社長を相手に色んな話しをする機会が増えたと言っていた。どんな話しをしているの？と水を向けると『知行合一』の話しを先回はしたと言っていた。この四文字は株式会社キューピーにずうと継承されている言葉だそうだ。『知った上で行動するとの意味だが、単に行動するだけでは駄目で、目標に到達する事が大切なんだ』『到達するまで、遣り続けなければ意味がない』と話したそうだ。

なるほど、これはいい話を聞いたと思った。正しくその通りだと。それでそこまでの事を四文字熟語にするとどうなる？と問うと、う～んと言ったままだったので、『では自分で、いっぷくしながら考えて来る』と部屋を出て、ぼんやりしている間に『知考行達』なる言葉が理屈の上で出て来た。最初は『知考行的』と出て来たが、何だか面白味に欠けると思い、もうひと巡りして『的』を『達』に変える事にした。どっちでもいいじゃないかという向きもあるかも知れないが、こっちの方が増井さんの話しの意に沿う様な気がした。知って、考えて、行動して、目的を達成（成就）させるという内容だ。

今、数年前に習った PDCA をまわして、それぞれの企業の業績をアップさせるという事に取り組んでいる。今のところは未だ、自分の頭の中でだけ PDCA が回っている感じだが、袖触れ合うごとに同じ話しをし、その実現を求めながら更に知恵を絞っていると、何となく縮小経済下のスーパーマーケットの戦略変更が見えて来た。着目点は商品部から店舗運営部への主役移行。つまり、バイヤーより店長に着目する方向転換。高度経済成長時なら商品部で利益を把握する方が多店舗展開でマスを狙いやすい事は容易に想像がつく。だけど縮小経済下に於いては不採算店を閉じて行かなければならなくなっている。これは幾ら商品部がしっかりしていても駄目な店舗は駄目という事に過ぎない。これを繰り返せば、固定費は重くのしかかって来る。

つまり店舗毎に収益構造が出来上がらない限り、事業規模も縮小の一途を辿るのは凄く自然な流れだと思える。登山と下山の歩く戦略は違って当然だ。

社会はピークに達し、下り始めている。下る時に雪だるま式に大きくなるためには、登っている時と同じではない、これが過去の成功事例にしがみついていると・・・と言われる所以だと分かる。分かるから次代にマッチした戦略を組めたような気がする。

有限会社アルファー：吉田清一郎